

価値観をめぐるやりとりにおける成員カテゴリー化装置

—日本語を母語とする大学生の雑談の分析から—

高井 美穂(大阪大学)

1. はじめに

本研究は、日本語母語話者の雑談における価値観の共有のやりとりにみられる規範を、会話分析の手法を用いて明らかにしようとするものである。私たちは、親しい友人との雑談において、互いに私見を述べ合ったり、価値観を述べ合ったりすることがある。意見を交換するという行為はこれまで、公的な性格の強い「議論」「討論」「ミーティング」「シンポジウム」といったものを対象とし、テレビ番組や実験的環境のもと行われた話し合いの録音データをもとに、談話の構造や運営にかかわる手続き的発話にかんする研究が蓄積されてきた(柏崎 1996, 梶本 2000, 寅丸 2006, 星野 2010 等)。一方、雑談において自然発生的に生起する私見のやりとりがどのようになされるのかは管見のかぎりまだ十分明らかにされておらず、日本語学習者を対象とする会話教材でそうした方法を学習項目として取り上げたものも見当たらない。本稿では、日本語非母語話者を対象とする日本語の会話教育への応用を念頭に、友人間の雑談にみられる価値観をめぐるやりとりを取り上げ、会話参加者らが何者としてふるまい、どのように自らのカテゴリー化を実践しているのかを会話分析の手法によって明らかにしたい。

2. データと分析方法

データは日本語を母語とする同性の大学生及び大学院生の友人二者間の雑談(のべ約6時間)の録音、およびその文字化資料である。会話参加者は9組(男性ペア3組, 女性ペア6組)18名で、録音は近畿地方の大学の食堂や研究室にて行った。ICレコーダーの録音ボタンを押した後、筆者は退席し、自由に行ってもらった雑談を30分から1時間程度録音した。録音中の飲食は制限しておらず、話題も指定していない。

まず、録音の文字化資料から価値観にかかわるすべてのやりとりを抽出し、会話分析の転記記号を用いてトランスクリプトを作成した。次に、これらのやりとりを、連鎖組織、及び成員カテゴリー化装置(Sacks 1972)の2つの観点から分析した。

成員カテゴリー化装置とは、少なくとも一つのカテゴリーと一人の成員を含む母集団に適用される成員カテゴリーの集合とその適用規則からなるしくみである(Sacks 1972)。適用規則には一貫性規則と経済規則がある。一貫性規則とは、同じ母集団内の人をカテゴリー化するさいには同一のカテゴリー化装置の中の同じカテゴリーまたは別のカテゴリーを選択する、というもので、経済規則とは、ある人をカテゴリー化するのに用いるカテゴリーは一つで十分である、というものである。

抽出した価値観のやりとり全6事例は、ライフプランにかんするもの(4事例)と、それ以外にかんするもの(2事例)に分類できた。本稿では、後者の2事例のうち会話参加者らの価値観の相違がみられた1事例を取り上げる。本事例は、観光資源としての原発が話題となっていたもので、録音は2009年に行われた。

3. 分析結果

3.1 分析のターゲット

本事例は、岡田と島田の2人の女子大学生による会話である。分析のターゲットは、観光資源としての原発に対する岡田の評価(54行目)とそれに対する島田の不同意(58行目)である。なお、トランスクリプト中の人名はすべて仮名であるが、後述するように出身地が重要な鍵を握っているため、便宜上、福岡県出身の会話参加者を「岡田」、鹿児島県出身の会話参加者を「島田」とする。

¹ 結婚相手の年齢、経済的豊かさ、進路、オフィスでの身だしなみ等をめぐるやりとりがあった。

- (1)
- 49 岡田: ♪あみんな見に行くんだ♪.
50 (0.6)
- 51 島田: [うん
52 岡田: [へ:::
53 (0.5)
- 54 岡田: ⇒ そっか:.でも,鹿児島原発見るよりは福井の原発見たくない?
55 (0.4)
- 56 岡田: どっちかっていうと.
57 (0.87)
- 58 島田: ⇒ ん:なんで原発:見たがるの?(0.45)か分からない.
59 岡田: 確かにね:[:.
60 島田: [ん:
61 (4.66)

岡田の評価発話は、「・・・たくない?」という否定疑問文による同意要求の形式をとっている。この発話の直後は、この評価に対する島田の同意あるいは不同意が期待される位置であるが、島田の発話が産出されるのは58行目である。そして、その産出に至るまでの間には、次の三つの特徴が観察される。第一に、岡田の評価発話の後、0.4秒の間が生じ(55行目)、島田の応答は遅延されている。この遅延は、続く発話が非選好応答である不同意であることを予示(Pomerantz 1984)するものである。岡田が先の評価発話を拡張させ、「どっちかっていうと」という条件を加えることによって譲歩を示している(56行目)こともそれを裏付けている。第二に、岡田の譲歩の後再び訪れたTRPにおいても、島田の発話の産出は0.87秒の間によって遅延されている(57行目)。第三に、島田の発話冒頭に「ん:」というprefaceが用いられており(58行目)、やはり実質的な不同意の産出が遅延されている。これら非選好応答の特徴から、58行目の島田の発話は、岡田の評価に対する(少なくとも)同意ではない、といえるだろう。

さて、島田の発話は、「ん:なんで原発:見たがるの?」というものであった。ここで注目したいのは、岡田の評価が「見たい」という一人称でなされているのに対し、島田の不同意には、「・・・たがる」という形式が用いられている点である。このことは、「見たい」という願望をもつ主体が、第三者であることを示している。島田の不同意は、目の前の岡田ではなく、第三者に差し向けられているのである。以下では、このねじれが成員カテゴリー化装置の切り替えによって生じたものであることを論じる。

3.2 成員カテゴリー化装置

先行話題では、2人の出身である九州の各県の序列が話題となっていた。このやりとりにおいては、成員カテゴリー化装置「出身県」が利用され、岡田は「福岡県民」、島田は「鹿児島県民」³としてカテゴリー化されている。以下に示す1行目からのやりとりでは、鹿児島のセールスポイントが話題となっており、福岡出身の岡田が「空は青いし」「海も青いし」(7,9行目)とその美しさを挙げ、鹿児島出身の島田がそれを承認する(10行目)形でやりとりが進んでいる。岡田が最後に挙げた「砂浜は白いし」(12行目)は島田によって「ちょっと灰色だったりする」と修復され(14行目)、岡田がそれに理解を示し(16,18行目)た後、今度は島田が、岡田の用いた「・・・は(も)・・・し」という言語形式を利用して原発の存在をセールスポイントとして挙げる(23行目)。

- (2)
- | | | | |
|-------|-------------|----|-------------|
| 1 岡田: | すごいやん鹿児島. | 6 | (1.75) |
| 2 島田: | んん. | 7 | 岡田: 空は青いし, |
| 3 岡田: | もっと,売り出しなよ. | 8 | (0.4) |
| 4 | (0.9) | 9 | 岡田: 海も[青いし, |
| 5 島田: | ん::. | 10 | 島田: [°ん:° |

² 福岡出身の岡田が島田の出身地である鹿児島を終始からかうやりとりになっている。

³ 両者とも録音時は大阪府在住であったが、ここでは「〇〇県出身者」と同義のものとして「〇〇県民」と称することにする。

11	(0.3)	18	岡田: ° はいはい° , 灰がね? [hhh
12	岡田: 砂浜は白いし,	19	島田: [うん, 灰が.
13	(0.5)	20	岡田: .h::
14	島田: >ちょっと灰色だったりする<.	21	(1.0)
15	(0.23)	22	岡田: ね:.° ()° もっと, [()
16	岡田: あ, ね?	23	島田: [原発もあるし,
17	島田: うん.	24	(0.4)

「セールスポイント」であることに岡田が不同意を示す(25行目)と、地元・鹿児島県民である島田は、原発は観光地になっており、実際に観光バスが敷地内に入っていくのだと語る(27-29, 33-42行目)。観光バスに乗って原発を「見に行く」人々を、島田は「おじいさんおばあさん」と説明している(37行目)。

(3)

25	岡田: 原発売れないよね.	39	岡田: [はいはいはい
26	(0.3)	40	(0.4)
27	島田: え原発ね, ときどき:h	41	島田: 観光バスがhh やってきて,
28	(0.4)	42	: [入っていくよ.
29	: ¥観光地に¥なってる[よ.	43	岡田: [デ(h)モ(h) じゃ(h) な(h) い(h)?
30	岡田: [>うそん<	44	(0.4)
31	(0.4)	45	岡田: .h.h そ(h) れ(h) 反(h) 対(h) デ(h) モ
32	岡田: ¥ほんな[きれいなんや¥.	46	: (h) と(h) か(h) じゃ(h) な(h) い(h)?
33	島田: [¥なんかあ:¥.h ¥きれい	47	(0.4)
34	: じゃ¥ないけど,	48	島田: ¥デモじゃないよ¥.
35	(0.27)	49	岡田: ¥あみんな見に行くんだ¥.
36	岡田: あ:[¥ものめずらしい¥	50	(0.6)
37	島田: → [なんか, おじいさんおばあさん	51	島田: [うん
38	: [を, 満載した,	52	岡田: [へ:::

再びターゲット発話に戻ろう。岡田の評価に対する島田の不同意における、「見たがる」の主体、すなわち島田が不同意を差し向けているのは、目の前の岡田ではなく、第三者であった。そしてこの第三者は、先の島田の説明、すなわち原発が観光地になっていることの説明に登場した「おじいさんおばあさん」として岡田に理解されている。58行目の島田の問いの答えにあたる73行目の岡田の発話には「おじいちゃんおばあちゃんたち」というカテゴリー名称が用いられているからである。

(4)

53	(0.5)
54	岡田: ⇒ そっか:.でも, 鹿児島原発見るよりは福井の原発見たくない?
55	(0.4)
56	岡田: どっちかっていうと.
57	(0.87)
58	島田: ⇒ ん:なんで原発:見たがるの?(0.45)か分からない.
59	岡田: 確か:こね:[:.:
60	島田: [ん:
61	(4.66)
62	島田: なんか原発の, どころが, 美しいのだから分からない.
63	岡田: ↑美しさを, ↓を求めて, 行っとうわけやなくて,
64	(0.2)
65	島田: ん[:
66	岡田: [原発が見たいんやない?
67	島田: hh なん[で?
68	岡田: [こう世間があれほど騒ぐ, 原発とはなんぞやと.

- 69 島田: hahaha° .hh°
 70 岡田: ね. あれだけのお金を投じて, >作[られた原発とは<なんぞやと.
 71 島田: [ん:
 72 島田: なんぞやと.
 73 岡田: → ん: .>それを, おじいちゃんおばあちゃんたちは見に行くんじゃない?
 74 (0.37)
 75 島田: へえ:: ↑:

先行するやりとりでは、岡田と島田は出身県というカテゴリー化装置によって、自らをカテゴリー化していた。観光資源としての原発にかんするやりとりの開始における岡田の評価、「鹿児島原発見るよりは福井の原発見たくない？」(54行目)は、「非鹿児島県民」としてなされた発話として聞かれうる。一方、それに対する島田の不同意「なんで原発:見たがるの?」は、自身と岡田ではなく、自身と「おじいさんおばあさん」をカテゴリー化するもので、カテゴリー化装置「年齢」が利用されている。この装置の切り替えは、「鹿児島県民」と「非鹿児島県民」という対立関係を解消し、対関係にある「おじいさんおばあさん」を登場させることによって岡田と自身を同じ「若者」としてカテゴリー化し、岡田との共-成員性を可視化させることに成功していた。

4. おわりに

以上の分析から、不同意の産出に際して、対立を回避する手段として、成員カテゴリー化装置を切り替え、対関係にある第三者を登場させることによって相手と自身を新たな装置によってカテゴリー化し直し、共-成員性を可視化させようとしていたことが明らかになった。高井(2019)では、女子大学生2名による結婚相手の年齢をめぐる価値観のやりとりにおいて、成員カテゴリー化装置「ジェンダー」が利用されていたこと、「『女の子』とはこういうものである」という形で提示された意見は会話参加者間で一致しなかったが、一致させる方向へは向かわず、対関係にある「男の子」について語ることによって、「女の子」としての共-成員性が維持され続けていたことを明らかにした。本稿で取り上げた事例では、出身県の装置のままではカテゴリーの対立が生じるため、装置そのものを切り替える行為が観察されたが、話者らと対関係にある第三者を評価することによって自身らの共-成員性を維持しようとする行為は共通するものであるといえる。以上のことから、日本語母語話者の雑談としての価値観のやりとりにおいて、会話参加者間の意見の一致だけでなく、カテゴリーの対立の回避や共-成員性の維持への指向も重要な規範となっているのではないかと考える。

謝辞 本研究はJSPS 科研費(課題番号 JP19K13231)の助成を受けたものである。

参考文献

- 星野祐子(2010). 課題解決型話し合いにおける手続き的発話 都留文科大学研究紀要, **72**, 都留文科大学, 41-59.
 柏崎雅世(1996). インフォーマルな[と]相談における談話運営の発話 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, **22**, 東京外国語大学, 15-31.
 Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments; some features of preferred/ dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge University Press. 57-101.
 Sacks, H. (1972) An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*. The Free Press, 31-73. ((北澤裕・西阪仰(訳)会話データの利用法—会話分析事始め—北澤裕・西阪仰 編訳(1995) 日常性の解剖学, マルジュ社, 93-174)
 梶本総子(2000). 人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造 世界の日本語教育, **10**, 国際交流基金, 221-239.
 高井美穂(2019). 日本語母語話者の価値観の共有における成員カテゴリーの利用と実践—ライフプランをめぐる女子大学生の雑談の会話分析から— 日本語・日本文化研究, **29**, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語日本文化専攻, 86-103.
 寅丸真澄(2006). 日本語の討論の談話における「意見表明」の構造分析 早稲田大学日本語教育研究, **9**, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 23-35.